同朋

2026 11 November

CONTENTS

特集

02 インタビュー　加藤三郎
爆弾を作っていたとき、
空しくってしようがなかった。

05 **師のある生活**

06 師匠の落語はいつも私を
原点に帰らせてくれる存在　桂二葉

09 師を持つ、ということ。　にのみやさをり

12 遠い先にはいつも彼女の姿が　富岡すばる

15 「一人」として、「個」として師に向かう　源淳子

17 有縁の知識　尾畑文正

19 煙　世菜／河鹿

36 もう少しプレイバック同朋　生活は単純なほうがいい！　菅原文太氏（俳優）に聞く

39 解説　俳優・菅原文太を語る／ダブルダイナマイト（てらさわホーク×大山くまお）

48 映画『となりのとらんす少女ちゃん』公開に寄せて
インタビュー「みんな生きてんだけど?」って思うし、僕自身も生きたい。／東海林毅

連載

22 土井善晴のお斎の風味をたずねて／文＝土井善晴　写真＝瀧本加奈子

25 どうぶつパズルdeひとやすみ

26 ペコロスのほどけてしゃがんで／岡野雄一

28 歌壇／永田淳　俳壇／藤原哲

31 同朋のひろば

31 仏事作法のひとこま／近松誉

32 聖句を味わう／一楽真

33 後生の一大事を心にかけて――ニューヨークから開教便り／名倉幹

34 釈迦発遣の八正道／大島義男

41 地獄・極楽を読み解く――新解『往生要集』／文＝ロバートF.ローズ　絵＝我喜屋位瑳務

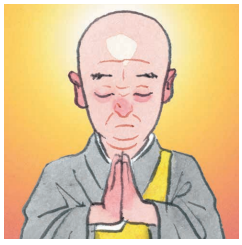
44 風の便り／小幡彩貴

46 あなたのとなりの僧侶（おぼうさん）

51 対話　生きづらいこの世界でも／渡辺志保×竹田ダニエル

54 日々平熱のソウル／中田亮

55 叫ぶ掲示板／遠藤麻衣



＼ 表紙絵 ／
北村人
絵本作家＆イラストレーター

師を持つ、ということ。

にのみや さをり

今年3月。師が亡くなった。

師との出会いは私が高校3年の春に遡る。国語演習という選択授業を担当したのが師だった。私にとっては初対面の授業で、先生は開口一番こう言った。「受験に読書は必要ない。本など読むな」。

私は仰天した。なんてことを言うのだろう、国語の教師が生徒に向かって本を読むななんて、ふざけてる、と。その後の先生の言葉は、あまりに仰天し過ぎて記憶にない。ただただ「本を読むな」と言った先生のその声が、私の頭のなかで、しばらく木霊し続けた。

当時私は、周囲の人間すべてに心を閉ざしていた。人間なんて糞くらえ、誰も信じるもんか、と、そう思っていた。学校にはとりあえず出てくるが、誰とも口をきかない、そういう毎日だった。

そんな私にとって読書は、唯一の「対話」の時間だった。自分が周囲に心を閉ざしているにも関わらず、私は対話やひとの温みに飢えていた。だから貪るように、毎日毎日本を読んではその渇きを何とか癒していた。言ってみれば読書だけが私の、安らぐ時間、あたたかい場、だった。本だけが、私の信じる「友」だった。だのに。

「本を読むな」。この言葉は私の心を抉った。私は憤りに任せて先生に手紙を殴り書いた。放課後、先生に無言のまま手紙を突き出し、帰宅した。本を読むなと言われて素直に本を読まない自分ではない。しかし、本を読みながらもその夜、先生の声が脳内に木霊した。それが悔しくて尚更、私は本を抱き締めた。

翌日登校すると、程なく放送が流れた。「3年C組にのみやさをり、国語教官室まで来るように」。ぎくっとした。昨日自分が手紙を叩きつけた先生の声だったからだ。しかし、名指しされたのに行かないわけにはいかない。渋々教官室へ行くと、先生は真正面から私を見、昨日の手紙への返事だ、と言って分厚い原稿用紙と一冊の詩集を差し出した。これは自分が昔とある詩人に頼まれて原稿を書いた、それが載ってる詩集だ。よかったら受け取ってくれ、と。

私は次の授業をサボり、図書室の一番奥の席で手紙を開いた。原稿用紙8枚に渡る長い手紙を、私はじっと読んだ。「おまえの気持ちを考えず、一方的に言葉を吐いてしまった。申し訳ない」という言葉で始まる手紙には、何故あんな言葉を自分が言ったのか、その理由がきちんと記されたうえ、自分にとっても読書というものがどれほど生きる支えになってきたか知れないということが綴られていた。今読んでいる本はこんな本だとか、この学校に来ておまえみたいな奴と出会えるとは思っていなかっただとか。

読み終える頃には、私の心は解けていた。疑心暗鬼の塊のようになってじっと読み始めた自分だったが、まっすぐに私に向き合おうとしている先生の言葉が、ただただ、心に響いた。教師が、いや、ひとりの大人が、たかが生徒に向かって謝罪することがあるのだと、しかもこんなにまっすぐに、自分のことをたかが生徒として扱わず、ひとりの人間として扱ってくれる先生が、大人が、この世界にちゃんといるんだ、と。私はそのことを、このと

遠い先にはいつも彼女の姿が

富岡すばる

ふと気づいてみると、怒りを忘れた大人になっていた？

人生に到達点というものはないということを、この年齢になってやっと痛感している。肉体は間違いなく41年分の時間を経ているのに、魂は25年とちょっとぐらいの時間しか経っていないかのようで、今も次から次へと新しい人生の課題にぶつかり、そのたびに右往左往するばかり。20代の頃は40代といったら、人生のゴールにとっくにたどり着いている世代だと無条件に信じていたが、現実は全くそうではない。

今は確かに些細なことで心をすり減らすことも減り、身の丈以上の贅沢を望まなければ生活も安定していると言える。だが、すり減った心を怒りという燃料に変え、ライターとして文章を書いてきた私にとって、心がすり減らずに済む安定というのはクリエイティビティの喪失でもあった。以前の私は持て余すほどの怒りを抱え、逆に怒りとは無縁のごとく生きて社会になじんでいるように見える大人に軽蔑のまなざしすら向けていたのだが、気づけば自分自身が正にそんな大人になってしまっていたのだ。

絵：かたおか朋子

世界のデフォルトとして想定されていない者の憤り（いきどお）

私にとっての怒りとは何だったのか。自分のなかにある、言いようのない怒りの存

煙

世菜／河鹿

*この文章には、性加害の描写があります。

先生、覚えておられますか。いつかの講義の途中で、あなたが言ったこと。

「道っていう漢字の成り立ちはさ、戦で殺した敵の首を引き摺って歩いた逸話から来てるんだよ」

皮肉屋だったあなたは、唐突にそんなことを言って、ひとりで笑っていましたね。「自分の道を見つけなさい、とかよく言うけどさ、それってつまり、殺した相手の首を引き摺って歩け、ってことだよね」。

まるで、私たちの行く末を予言していたみたい。そんなことを思うのは、何事にも意味や理由を探すことでしか生き延びられなかった私の、悪い癖でしょうか。あなたの言葉通りに、私は律儀にあなたの生首を引き摺って、この道を歩んできました。気づけば、首は見当たらない。固く握りしめていたはずの頭髪が、わずかにこの指に絡みついているだけで。一体、どこで落としてきたのでしょう。どこに行ったのでしょう。食べてしまった、骨ごと、食べ尽くしてしまったのでしたっけ。

伺いたいことがあるのです。教え導く立場にある人間は、何をもって「先生」ではなく「師」と呼ばれるようになるのですか。あなたは、私の「師」だったのでしょうか。私は未だに掴みかねています。十年前、教え子だった私を突然抱きすくめて四肢を封じ、無理矢理に口づけをした人間を、不同意性交や性的同意といった言葉が今ほど語られなかった時代に、泥酔した教え子を犯した人間を、果たして「師」と呼ぶべきかどうか。私にはわかりません。「師」の口止めを裏切った「弟子」のことは、何と呼べばいいんでしょうか。先生、私は、あと五年も生きたら、当時のあなたと同じ歳になります。二十歳そこそこの、十五歳も年下の教え子に、酔いに乗じて手を出した、大学の准教授だったあなたと、同い年になります。

先生、ずっとわかりませんでした。なぜ、あなたは、あんなことをしたのか。なぜ、私だったのか。どれだけ問い続けても、納得がいかなかったのです。なぜ、私の人生は壊されなければならなかったのか。なぜ、あなたが教壇から去らなければならなかったのか。あなたの首を引き摺って歩く以外に、自分の道を見つける方法は、本当になかったのか。

「偽のわかりやすさに慣れてしまうと、世界は狭くなる。わからないものをわからないままに受け止める経験、豊かで鮮やかな困難に向き合う経験を、学生から奪ってはいけない」

かつてあなたは、そんなことを新聞記事に書いていましたね。確かに、あなたの講義は難解でした。そして、抜群に面白かった。音のなかった世界に、突然、音楽が溢れ出した瞬間のような、白黒だった世界が、瞬く間に総天然色に塗り替えられていくさまを目撃しているかのような、そんな、驚きと喜びに満ちた学びでした。

せな／かじか

作家。文筆活動のほか、絵画や写真、コラージュなどの表現活動も行う。主な著書に『あなたを食べて生きてきた』『はなせなかった』など。

もう少しプレイバック同朋

先月号から、いましばし先達の智慧を頂戴しようと始まった、このコーナー。今回再掲するのは45年ほど前の記事。俳優、菅原文太さんの聞き書きです。こちらは、「挫折からの出発」と題された特集（1982年10月号）中の一幕。当時問題視された子どもの「非行」より、大人の責任をガツンと糺す言葉。AIだのと浮かれる前に、今あらためて、その警咳にふれるべきでしょう。

第2回

生活は単純なほうがいい！

菅原文太氏（俳優）に聞く

すがわら ぶんた
（1933～2014）
宮城県仙台市生まれ。早稲田大学法学部を中退。代表的な主演作に『仁義なき戦い』『トラック野郎』などがある。2014年11月28日に逝去。

大人の〝三無主義〟

明らかに今日には、文明の過剰な発展がもたらしたひずみがあります。ついこの間の敗戦から今日の繁栄までに、わずか三十七年。その間に、今の繁栄というものは、大人は、人間の心より科学を優先したということが、まぎれもなくある。それは、子どもたちには想像もつかないほど急激で、精神的についていけるものではなかったはずです。

大人は物質的に貧しい時代からスタートしているから、ちょうど文明と社会のバランスがとれていたときからスタートしていると言える。ところが、子どもたちはこのバランスの崩れたところで生まれ育っているから、子どもたちの考えや精神に行き詰まりがあり、非行があるとすれば、それは機械文明の異常な発達がもたらしたものであると私は感じます。その、子どもたちの心身不安定な人間に育った環境を志向したのは、大人たちです。……大人がゆがんでいるのでしょう、それは明らかです。

大人の生きざまと言えば、物質優先、金銭尊重。第一にそれがくる。金に振りまわされ、金を振りまわし、金ですべてを解決しようとする生きざま、これは、大人の人間としての非行だと言ってもいい。しかも、その物や金銭に置き替えている時代になってしまったことに、それが変だ！おかしい！ともあまり気づいていない。

そういう大人が作った社会のなかに子どもたちを放り出しておいて、子どもたちの非行が多いと言っても、それは大人は〝三無主義〟、つまり、無自覚、無責任、無感覚になっているから言えることです。たとえば、暴走ひとつ挙げても、大人で車を持っていない人はいないと言ってもいいし、店先に行けば、ショーウィンドウにオートバイをズラーッと並べ、子どもたちの本能をくすぐるようなことをしておいて、「コラー、お前ら、車乗ったらあかへんど！」と言ったって説得力はない。まして、自分は車でスーッと出勤。これじゃ片落ちでしょ。それよりもまず、「オレ、車やめた」と言って、朝少し早く起きて駅まで歩いて行くことをすれば説得力を持つのでないですか。

続きは本誌でどうぞ

もう少しプレイバック同朋・解説

俳優・菅原文太を語る

一歩ずつ社会と向き合っていった映画スター

ダブルダイナマイト

（てらさわホーク×大山くまお）

絵：かたおか朋子

――今月の「もう少しプレイバック同朋」（36～38頁）は、俳優の菅原文太さんの聞き書きを掲載。映画ぼやきユニット「ダブルダイナマイト」のお二人に文太さんの代表作のことなど、解説していただきました。

＊　＊　＊

頑固で、ちょっと無骨な感じ

ホーク　文太さんを初めて観たのは、たぶん僕らが子どもの頃のＣＭですよね。

くまお　「朝日ソーラーじゃけん」ですね。その後、お正月の深夜にまとめて『トラック野郎』シリーズ（１９７５～１９７９）をテレビでやっていたりして。これがもう、ほんとに腰を抜かすほどバカで、おかしい映画なんだよね（笑）。だから、映画スターとして、物心ついた時から知ってました。大学生の頃は、『仁義なき戦い』（１９７３）のリバイバル・ブームもありました。『仁義』では、広能昌三（ひろのしょうぞう）というやくざの親分を演じていますね。

ホーク　僕が好きなのは、やっぱり『仁義』の特に第３作『代理戦争』と第４作『頂上作戦』ですね。この２作はセットで無限にループしてるから、もう何回観たかわからない。あそこに文太さんのすべてがあるとさえ思う。

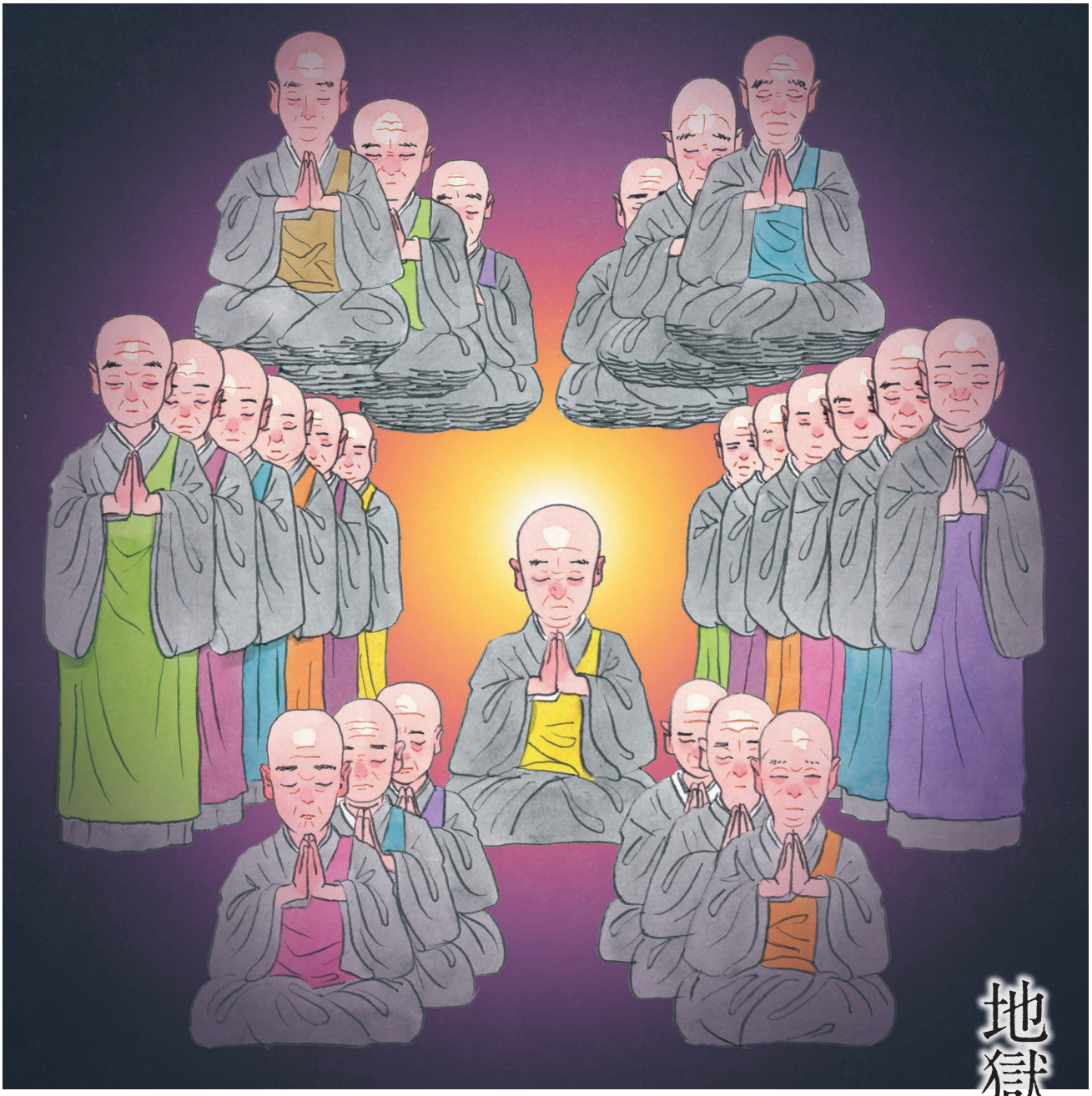
くまお　『仁義』で小林旭（あきら）さんと共演してるんだけど、すごく対照的なんだよね。文太さんは頑固で、ちょっと無骨な感じがすごくいい。

ホーク　そうなんですよ。それが広能という役であり、文太さんであるという。現実と虚構の区別がついてないじゃないかっていう（笑）。

くまお　文太さんは亡くなられる直前、２０１４年の沖縄県知事選で翁長雄志（おながたけし）さんの応援演説に立たれて、最後に「弾はまだ一発残っとるがよ」と、『仁義』の名台詞を引用されたんです。現実と虚構の区別がついていない私たちは大熱狂しました（笑）。

ホーク　まさに。その演説では、「（政治の最も大切な役割は）絶対に戦争をしないこと」と言い切られていましたね。少し前の２０１１年に東日本大震災が起こった時は、宮城県のお生まれということもあり、反原発のメッセージを発信されていました。

続きは本誌でどうぞ



地獄・極楽を読み解く
――新解『往生要集』14

文＝ロバートF.ローズ
絵＝我喜屋位瑳務

源信と二十五三昧会

前回まで『往生要集』の内容を確認してきましたが、今回は『往生要集』から離れ、源信が参加した二十五三昧会という念仏結社の活動について紹介します。

二十五三昧会の結成

『往生要集』が完成した約一年後、源信が隠遁している同じ比叡山の横川で二十五三昧会が結成されました。寛和二（九八六）年五月二十三日の日付の『楞厳院二十五三昧根本結衆二十五人連署発願文』（以下『発願文』）には、その結成趣旨が説かれています。

続きは本誌でどうぞ

映画『となりのとらんす少女ちゃん』公開に寄せて

「みんな生きてんだけど？」って思うし、僕自身も生きたい。

東海林毅（しょうじ つよし）

1974年生まれ。映画監督。近年の作品に『片袖の魚』(2021)、『老ナルキソス』(短編2017・長編2023)などがある。

日本のクィア映画を牽引する東海林さんが、新進のマンガ家 とら少 さんの『となりのとらんす少女ちゃん』を映画化（11月7日より順次全国公開）。未来より現れた10年後の自分に「今から性別移行に備えるように」と説教される？——そんなSF要素を交えた「下町人情コメディ」。製作の経緯から今作への思い、クィア映画を取り巻く状況などをお聞きしたインタビューです。

＊　＊　＊

「ここにいるよ」とちゃんと伝える

『片袖の魚』という作品では、日本で初めてトランスジェンダー当事者の俳優をオーディションで選び、キャスティングしました。その主演を務めたイシヅカユウさんが『となりのとらんす少女ちゃん』の出版を支援していたことをきっかけに原作を知ったんです。非常に映画向きで当事者じゃないと書こうとも思わない立場になったからこそ、自分を救ってくれたような作品を届けたい。今回もそんな思いで作っています。

今作はトランスジェンダーの物語をコメディで描いています。作中で、未来の自分に「コーヒーと紅茶、どっちが好き？」と質問される場面があるんですけど、今現在の自分はコーヒーが苦くて飲めないんですね。未来の自分が言うには、それはお前が女だからや、と。「やっぱり女子はみ～んなアフタヌーンティーやからなあ」、「ちゃうわい！」みたいなギャグシーンです。これはどうしても僕がやりたくて付け加えた、映画オリジナルの場面です。昨今「男らしさ女らしさみたいなものから一度離れましょう」という言説がある程度高まっている世の中だからこそ、あのいような内容に驚き、翌月には出版社に連絡して、映像化のために動き始めました。

近年、世界的にトランスジェンダーの存在自体を消し去るような動きすらあります。そういった意味でもタイトルに「とらんす」という言葉をドカンとつけて、「ここにいるよ」と伝えることにも意味があると思うんですね。僕自身、中学高校の頃にいろんな映画、特にクィア映画を観て救われた経験があります。自分がギャグは成立すると思っていて。数十年前だったら、そもそも何がギャグなのか、わからないと思うんですね。男らしさ女らしさっていうものから距離を取りたいと作中で意思表示することも大事かなと考えて作った場面です。

個人を通して社会が見えてくる映画

自分の居場所がなく苦しんでいる人、自分を表に出せないと悩んでいる人は世界中にいます。特に若い人たちには少しでも明るい気持ちになってもらいたい。クィアの苦しい姿を描き、当事者ではない人たちにも問題意識を持ってもらうという手法もありますが、今回の作品はコメディというみんながとっつきやすい物語なので、作品のなかに一度入ってもらい楽しんでもらって何かを持ち帰っていただけたら、と。

あと、もしかしたら「性的マイノリティの話だから笑ってはいけない」とか思う方も多いかもしれませんね。当然、その人の尊厳や存在そのものを笑いものにすることは絶対にやってはいけないことです。でも、ふだん生きていれば面白いこと、思わず笑ってしまうことは誰にでもある。そこはみんなで笑っていいんだと気づいてもらえたら嬉しいですね。

物語のなかにクィアが登場した場合に、僕の考えですが、一般化が起きると思っています。例えば講演会に呼ばれた時に「子どもの頃に性的マイノリティとして感じた苦しみや痛みを話してください」と言われることがありますが、僕はできれば断りたい。僕個人の経験を話せば同情は集まるかもしれません。でも、それぞれする経験って別物なので、僕への同情が誰かの生きやすさにつながるとは思えないところがあります。

映画やドラマに置き換えてみると、そこに出てくる人は特定の個人ではないんですね。誰かの意図を受けて誕生した一般化された人物が、いろんな差別を受けたり、闘ったり、苦しんだり、克服したり経験していく姿を見ることで個人の物語のみならず、実はそこに社会を見てるというか、社会構造を見せることができると思っています。少なくとも自分の作品に関しては、個人の物語を通して、その後ろにちゃんと社会が見えるようにしたいですね。

作劇のためにクィアを死なせない

映画の上映で地方に行くと、東京や大阪などの大都市と格差をすごく感じます。都市部では観に来てくれた高校生が、「おれ、差別とか受けたことないっす」とあっけらかんと話しかけてくれたりします。そんな時は、「君はそうかもしれないけど、苦しんで闘ってきた当事者がいるからそれは勉強して」と伝えますが、そう言える子が出てきたというのはすごく頼もしいことだとも思うんです。でも、地方都市に行くと「周囲に当事者が一人もいない」とか、深刻な悩みを打ち明けられることもあります。

地方の映画館に営業で訪れた時「うちの映画館、高齢者ばっかりだからLGBTとかないんですよね」などと言われたこともありましたが、セクシュアリティをオープンにしてこなかった高齢の当事者も絶対いるのに、いないことにされる現状は変えたいですね。

これまで多くの映画のなかで、クィアは自ら命を絶つか、殺されるかという悲劇的な存在として描かれることが結構ありました。そんなの納得できるわけないじゃないですか。「みんな生きてんだけど？」って思うし、僕自身も生きたい。少なくとも自分の映画では、ドラマを成立させるためにクィアを殺さない。このことは誓っています。

中川未悠さん演じる「女子はみ～んなアフタヌーンティー」の場面。そんなことはないが、紅茶が好きな女性は当然いる　©2026みのむしフィルム

『となりのとらんす少女ちゃん』
脚本・監督／東海林毅
出演／中川未悠 高橋侑太 はるな愛
原作／とら少『となりのとらんす少女ちゃん』(在野社)
製作・制作／みのむしフィルム
配給／ミカタ・エンタテインメント

公式HPはコチラ

第2回 **兵戈無用** | 遠藤麻衣

道端に生えている蔦や草花を採取し、擦ったり叩いたりして古い襦袢に写しとる。鮮やかな植物の色彩は日光で次第に褪色していく。この文字が消えるとともに争いが無くなることを願って。金沢の花屋「eyes of universe」にて、訪れた人たちと共に制作。

編集部より

親鸞が大切にしたお経『無量寿経』の一節、「兵戈、用いること無し」。仏陀がいるところでは、人々が武器を手に争うことがない、と説かれています。核兵器も、殺人ドローンもない古の時代の教えですが、人類衷心の願いは現在も変わりません。

えんどう まい●クソデカフラッグ部。アーティスト。主な展覧会に「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」(国立西洋美術館)や「フェミニズムズ」(金沢21世紀美術館)など。ZINE『Multiple Spirits』編集。

叫ぶ掲示板